

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに

中村, 哲 著

終章 溪谷の村で

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

出版情報：ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに,
pp.305-317, 1993-11. 石風社

バージョン：初版、1993-11-30

権利関係：©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

終章 溪谷の村で

平和

一九九三年四月も中旬になって、JAMS・ペシャワール診療所とミッション病院らしい病棟の現状維持の見通しがある程度立ち、最大の懸案であったアフガニスタン内部クリニックへの視察が可能となった。四月十六日、やっとペシャワールを発つことができた。

「やっと発つことができた」というもう一つの意味は、ペシャワールでは何ら希望がなく、「明るいヒンズークッシュの山々でも拝めば気も晴れよう」という、私自身の幾分やけくそな気分があった。同じく不似合いな事務仕事の上に「財政危機」でくさっていたムーサーと共に、狩猟用のライフル銃を携えてカイバル峠を越え、ダラエ・ヌールからダラエ・ピーチに向かった。だがその通り、ヒンズークッシュの山々は我々を欺かなかったのである。

カイバル峠を越えると、左手かなたに四〇〇〇メートル級のサフエード山系、右手にダラエ・ヌールに連なるクンド山系が、純白の美しい稜線を見せて我々を迎えてくれる。一週間続きの雨

が上がつたばかりの晴天で、山々は銀白色の眩い雪で覆われ、空気は澄み切って手が届くようであつた。

途中、相変わらず政治党派の検問所が道を遮つた。ある場所を通過した時「こら、バカ」という声が聞こえた。見張り番の誰かが退屈まざれにからかつたのである。突然猛スピードでムーサーが引き返し、五、六名の軍民を相手に罵声を浴びせた。

「今、バカと言つたのは誰だ！ 出てきやがれ。ムサルマン、ムサルマンてバカのように繰り返しや、金がふんだくれる訳じゃねえぞ。」

やれやれ、いつもの懐かしいパターンだ。ペシャワールでは見られぬ光景だ。銃弾が飛び交わなくなつたのは、平和になつた証拠だつた。「行け行け、ぐずぐずすりや日が暮れるぞ」と促して出発できた。

成功だ！

ドラエ・ヌールへは、かつて北部のナワ峠を越えて十二時間かかつていたのが嘘のようで、ペシャワールから僅か三時間で行けるようになっていた。しかも、一步谷に入れば、何と子供たちが群れて遊び、大方の家々は修復され、豊かな小麦畑が広がつていた。JAMS診療所の記録によれば、昨年五月から約七千家族が帰郷し、最低三万人が難民キャンプから戻つて耕作を始めていた。約九五パーセント以上の帰郷である。下流域ではまだ荒地が残つていたが、水路の補修

は殆ど独力で始められ、これも時間の問題のように思われた。地雷も九九パーセントは、地元住民の手で処理されていた。

深紅と白色を取り混ぜたケシの花が満開で、真つ白な山々を背景に美しくのびのびと咲き乱れていた。だが、ケシ畑の数は昨年より激減していた。国連の「刈り取り報償金」がその年になって停止したためである。

人里の心地よい喧噪——間延びしてのどかな牛の声、収穫をねらう雀たちのさえずり、子供達の遊ぶ楽しいどよめき、羊の群れを追う叫び、水車の音……誰が二年前にこの光景を予測できたろうか。猟以外の銃声もめつきり減った。銃を握って険しい目付きをしていた青年達は、バレーボールに打ち興じていた。人々はまた、猜疑心や警戒心から解放され、我々と親密になっていた。復活した農村生活は、何のトリックも何の虚飾もなかった。

スタッフたちの心にも変化が起きていた。JAMS診療所では、初めあんなに嫌がっていたスタッフたちが冗談を地元民と交わし、バザールを歩けば皆が親しげに挨拶を送った。カブルからのスタッフたちも、「パシャイー部族の困難な状況」に同情し、「ペシャワールやカブルなんてマシな方だ」とささやきあっていた。地元スタッフたちは、ペシャワールでの慌ただしい都会の喧噪に辟易し、小学校ができた現在、家族たちを地元と呼び戻そうとしていた。

診療所のまわりの空き地に野菜畑が出来ていて、JAMSのイニシャルを象った畑の畝があった。野菜を作っていた地元スタッフのサルフラーズが言った。



ダラエ・ヌール診療所の診察風景*



ダラエ・ピーチ診療所のスタッフ

「嘘みたいですよ。覚えてますか。ほんの一年半前、ドクターと調査に乗り込んできたあの時のことを。ここはまるで砂漠みたいだった。見て下さい。谷中、緑だらけだ。これでいいんだ。」

所詮、わしらは百姓の子でさ。カブールで何が起ころうと関係ねえ。政治党派なぞクソくらえだ。私は嬉しくて仕方ないんですよ。この村の皆がJAMSの活動とドクターの愛情に感謝してますぜ。わしらは他の谷に比べたら幸せだ。ここでこうして落ち着いた元の暮らしができるようになったのも、JAMSのお陰だ。もう、ペシャワールもカブールもまっぴらだ。『人道的援助』『革命的改革』も同じこった。イスラム教徒は良いイスラム教徒であれば、それで良いんだ。」

「いい事じゃないか。だいたい都会はインチキが多いんだ。」

「その通りでさ。私はドクターと同じ思いの人間だ。もともと鉄砲なんて人間には要らないはずなんだ。それに今頃は、どこに行ってもカネ、カネ、カネ。しかし、ここじゃカネは作れねえが、食いものは作れますぜ。札束は燃料にしかならねえが、わしらの作ったものは食えますぜ。」

成功だ！ 無駄ではなかったではないか。我々の活動を媒介にして、皆が何かに向かって変わり、和やかさと協力が芽生えてきたのだ。クナールの血なまぐさい戦闘と破壊、荒れ果てた無人の村落、政治抗争——殺伐な一年前を思うと、感無量だった。報われて余りがあった。ムーサーも、他の十二名のスタッフたちも、ペシャワールでは見られないくらい生き生きしていた。

天命を知る

夜は猛烈なノミの襲来でしばらく眠れなかったが、目覚めは爽やかだった。この数ヵ月分の眠りを一晚で一氣に取り戻したようだった。私は生まれて初めて十四時間も眠った。朝食にはムーサーのしとめてきたシーシーという鳥が、特別に私のために料理されて出された。難民キャンプから戻ってくる家主が困っているため、診療所の移転が問題になっていたが、これも土地の多い農民たちが競って寄進を申し出て、程なく解決できる見通しがついた。新しい診療所が建てば、遠隔地から一日がかりでやって来る患者たちにも、ある程度入院サービスが可能になるだろう。

——建設費は何とかまかなえる程度だ。ペシャワール会の負担を増さず何とかなる。セメント以外は全てガラエ・ヌールで調達できる。この笑顔を絶やすな。この希望を吹き消すな。オレは何でまた、ペシャワールと日本の狭間でよくよしていたのだ。このためにこそ生きてきたし、日本側も望みを託してきたのではなかったか——そう改めて思った。

まさに、私自身のためにも、この仕事は存在していたのである。この心温まる農村の光景と、嬉々として働くスタッフたちの笑顔に比べれば、すべては小さなことだった。自分はこのために生きてきたのだ。自分の浅い知恵と狭い了見が、与えられる恵みと、それに対する感謝とを阻んでいたのだ。もし、人に与えられた意味とか当為とか云うものがあるとすれば、それは我々のちっぽけな思念を超えて、人間一人々々を導くものかなのだ。「天命を知る」とは老境の台詞だと思ってきたが、ここに至って決定的に「わが天命」を甘受させられた。



ダラエ・ピーチの診療所

ダラエ・ピーチ診療所にて

ダラエ・ピーチの診療所でも、活動が次第に活発化していた。増水で道路が決壊し、輸送に手間どっていたが、險路を越えて困難な補給は着実に行われていた。外來は日に百名のペースで続いており、さらに増えつつあった。中には上流のヌーリスタンから二日、三日と歩いて診療所にくる者も珍しくなかった。医師たちも心機一転、シャワリ医師の説諭が奏功したのか、生き生きとしていた。おおらかに目標に向かって働き、夜は大自然の中で身を寄せて忌憚なく心開き、冗談を飛ばして語り合える雰囲気を作られていた。

ただ、事情がダラエ・ヌールとはやや異なっていた。溪谷は長大で、ダラエ・ヌール級の谷は数え切れないほどある。診療所はこれら諸溪谷の袋の入り口に相当する。さらに、ベシャワールなどの大都市から余りに遠距離である。ダラエ・ヌー



診療所を修繕するスタッフ

ル方式では歯が立つまい、というのが診療所の周囲に泊まって列をなす患者たちを見たときの第一印象だった。山岳の多い地勢を考慮すると、ペシャワールを起点にする機動力は単純な時間の加算では考えられない。三時間のグラエ・ヌールと十数時間のグラエ・ピーチとは、輸送・人員配備・情勢把握の全ゆる面で、距離を二乗する困難を予想せねばならない。唯一の方法は、ペシャワール診療所に次ぐ準センターとしての機能を備えさせ、そこを起点とするサブセンターを数箇所に配備することである。しかし、それは現在のJAMSの力量を超える。まずはグラエ・

ヌール程度の規模の診療を細々と続け、十分に情勢を読んでから次の段階に備えるべきだと私は判断した。

訪れたその日に、上流から二日ばかりで運ばれてきた婦人が、子宮外妊娠で死亡した。着いた時には既に衰弱しており、激痛で息も絶えだえだった。せめて苦痛を和らげるために鎮痛剤を注射したが、間

もなく絶命した。急患の輸送まで我々はできない。手術設備など、この山中では不可能である。また、診療所からペシャワールまで十時間以上という時間もさることながら、概ね住民たちはバス賃さえ持っていないことが多い。診療所で診ることができるのは、歩いて来れる比較的軽症の者だけである。

一九七八年、初めてヒンズークッシュ山脈にやってきた時の事がまざまざと思い出された。あの時もそうだった。病人たちを見たとき、同じ人間でありながら、かくも違う待遇しか与えられぬ不条理に耐え切れず、その無念の思いが自分をここまで導いてきたのだった。しかし、それから十五年を経た現在、やや異なる感想を抱くようになっていた。いや正確に言えば、圧倒的な大自然の、恵みと掟との背反を、うなだれるように反芻せざるを得なかったのである。

神の業

現地では、弱って歩けない病人は容赦なく「淘汰」され、乳幼児死亡率は五〇パーセント以上である。これを皆は「悲惨だ」というが、どうしようというのか。万が一にも死亡率を日本並に下げ得たとして、食料生産の限られた谷間では、部族全体の生存が脅かされるだろう。彼らは、我々の手当てに厚く感謝して、「神の業です」と不運を甘受する知恵を備えている。それは自分を納得させる慰めであると同時に、厳しい自然の掟への謙虚な感受性である。それを「迷信」などと笑って崩す必要がどこにあるう。



山岳地帯からカゴで運ばれてきた患者



着せられた羊皮を切り裂いて介抱する。
これは部族民の伝統的治療法である。

だからとて、我々の医療活動が不要なのであろうか。しばしば医学者は「人類はヒューマニズムによって滅ぶ」などと言い、生物学者は、自然淘汰と適応の原理から、ヒトの特殊性が「技術で自然選択を拒絶する適応様式」と説く。まさにこの自然選択の拒否がヒトという種の内在的矛盾であり、「新しい種の連続的分化を妨げ、自然を無視して限りなく人工的な環境を技術によって作り上げ、やがて破滅に至る必然性を備えている」という。これは、少し自然観察に興味のある者にとっては、説得力ある恐ろしい話である。少なくとも、ヌーリスタンの山中から「下界」

を見る限り、かなりの勢を射ている。自然状態では、食物の量が動物種の個体数（人口）を規定し、自然の掟に合わせることによって種は自分の存続を図る。ところが、技術によって自然環境を遮断して生存を維持するヒトの適応様式では、簡単な衣類からハイテクまで、個体の欲望が技術力に応じて生産力を規定する。事実、世界の動向はまさに、自然から離反する事によって適応してきた人間の破局を実証しているように見えるのである。

このような論理に従えば、我々医療技術者もまた、細菌やウイルスによる自然淘汰を、「技術によって拒否する」のに手を貸していることになるのだらう。だが、それから人間の宗教や倫理観を論ずるのは、明らかに自然科学の越権行為と言わねばならない。我々の愛憎、喜びや悲しみなどの人間的事象、文化と呼べる生活形態一切を、単に適応の原理で割り切ることができないのもまた、人間の内的自然である。技術が節度を以て自然と併存すべきことが問題なのであって、ヒトの適応自身も「相互扶助」という内的自然に支えられてきたものではなかったらうか。いや、これは生物学のイロハも知らぬヤブ医者 of 戯言と考えられてもよい。

ただ一つ、譲れない事実がある。確かに、自然環境の遮断による適応が、必然的に人間の欲望を無限大に解放し、自然からの搾取・環境破壊に導くのは疑いない。しかし、一人当たりのエネルギー消費量は、日本や欧米諸国に比べると、ヌーリスタンでは数万分の一、数十万分の一に過ぎない。世界を破滅に導くのが、人口爆発そのものよりも、それによって来る消費と自然破壊だとすれば、極度に質素な生活形態を守り続ける山岳住民数万人の命は、先進国の住民一人分の害

も及ばさないということになる。

ある時私は、日本でこの環境・人口問題を問われて、「発展途上国の人口をとにかく言ったり、熱帯雨林の問題を割り箸の使用云々に矮小化するよりも、日本や先進諸国民の半分でも地球上から消えてもらった方が手っ取り早い」と述べ、冗談の分からぬ聴衆からひんしゆくを買った事がある。確かに冗談が少々過ぎるが、これは本当である。私の真意は、目先の「国際協力」を言う前に、我々が「進歩発展」として無条件に称賛し、それに立脚する生活を普遍的な人間の福祉とする考えを、もう一度真剣に問い直すことを説きたかったのである。極論すれば、先進国の国民や途上国の有産階級が「近代的生活」を営むこと自体が、破局への死の行進なのである。

我々が僅か数万名の山岳住民の生命を救ったとて、それが地球環境で何だというのだ。そんな紙上の議論よりも、極貧の中に豊かさを、異質なものに共通な人間を、発見し、ささやかに分かち合うことの方が、どれだけ意味があるか計り知れない。

人は必ず死ぬ。当然だが、生命体として逃れられぬ掟である。死神は恣意的に我々をつれ去る。いかに多くの所有を誇ろうと、いかに名声を得ようと、それをあの世に持ち去る事はできない。また、平均寿命三十年の生命が、八十年の生命より意義が薄いとはいえない。その時、我々の生きた軌跡が何かの暖かさを残して、人としての温もりと真実を伝えることの方が大切なのだ。今、この壮大な自然の懷の中で、いかに我々が、無用とはいえぬまでも、よいいなものに振り回され

て生きているか、よく分かるのである。

我々は現地活動を通して、深く狭い溪谷の底から彼方の天空を見上げるように、世界を眺めてきた。まるで谷底を這うアリのように、我々の視野は狭く、知恵は浅はかである。十年も満たぬわずかの体験から世界と人間について多くを語ることは、分に過ぎるのかもしれない。それでも、そこから見える光景は、我々が忘れかけた真実について一つの示唆を与えてくれるだろう。我々が本当に失ってならぬものについて、確かな実感が与えられるのである。

神々しい山々は、今日も泰然と我々を見下ろしている。それは恐ろしく苛酷でもあり、限りなく豊かな恵みにもあふれている。その中で、本当に我々に必要なものは何であるか、静かに論す不思議な力がある。それをくみ取るかどうかは、我々人間次第なのだろう。